

Academic Link



アカデミック・リンク  
コンセプトブック

アカデミック・リンクとは

我々は、「知識基盤社会」を生きている。知識基盤社会とは、知識や情報が社会の様々な活動において重視され、意思決定等において十分に活用される社会のことである。今日の大学には、このような社会を生きる力を持つ人材を送り出すことが求められている。2008年12月に公表された中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』は、学士力として、自らが専攻する学問分野の基本的な知識の体系的な理解とその意味の理解だけではなく、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力などの、知的活動でも職業活動や社会生活でも必要な汎用的技能をもち、さらに、社会的責任、倫理といった態度を身につけ、これらを総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力を提示している。

このような人材を養成するために、絶対的な方法が存在している訳ではない。なぜなら、どのように取り組むかは、大学の置かれている環境によって異なるからである。千葉大学は、その「憲章」において、「自由・自立の精神を堅持して、地球規模的な視点から常に社会とかかわりあいを持ち、普遍的な教養（真善美）、専門的な知識・技術・技能および高い問題解決能力をそなえた人材の育成」を掲げている。アカデミック・リンクは、この憲章に内在する精神を踏まえ、千葉大学が出した1つの答である。

アカデミック・リンクは、知識基盤社会を生き抜く力を持つ「考える学生の創造」を目的として掲げ、「アクティブ・ラーニング・スペース」「コンテンツ・ラボ」「ティーチング・ハブ」の3つの機能により「コンテンツと学習の近接による能動的学習の促進」を実現しようとしている。快適な学習空間、学習のための多様な資料群（コンテンツ），そしてこれらの利用や学習を支える多様な人材で構成される図書館を中心にこの活動は展開されるが、それを支える基礎には、図書館のみならず、ネットワーク基盤を提供する総合メディア基盤センターと教養教育の企画運営を担当する普遍教育センターが存在している。このような組み合わせは、千葉大学だからできることかもしれない。しかしながら、図書館、情報ネットワーク、そして教育実施組織の組み合わせは、高等教育・学習の改革を推進する上で普遍性を持つ、最善の組み合わせではないだろうか。なぜなら、コンテンツ基盤と情報ネットワーク基盤は、高等教育・学習を支える根幹であり、その上で学習がなされるのはごく自然な成り行きだからである。その意味で、アカデミック・リンクは日本の大学における教育、学習の改革に向けた先駆的モデルというべきものであり、その活動、ないし影響が及ぶ範囲は千葉大学に止まるものではないのである。

アカデミック・リンクに至る道

コンテンツを学習に活用するというアイディアは、古くからある。大学図書館の使命は、大学における教育研究に資する図書・雑誌などの資料を収集、整理、保管して提供することにあるとされてきたし、実際、長きにわたりその使命を果たしてきた。

授業と関わる形でコンテンツの積極的利用を促すのが「指定書」（reserved books）—特定の授業で使う図書を指定し、通常の図書とは異なる利用を想定して配置されるもの—である。指定書の歴史は古いが、1960年代の東京大学において、当時の岸本英夫館長の主導で行なわれた「岸本改革」によって強化が打ち出されたことで脚光を浴びた。岸本館長は、ハーヴァード大学図書館を範とした大学図書館の改革をめざしており、東京大学全学総合目録の編さんなどの顕著な成果を上げ、その後の日本の大学図書館の発展に大きな影響を与えたと考えられている。

しかしながら、指定書に関しては、必ずしも成功したとは言いたい。岸本改革が範とした米国においては、授業に先立って図書（の一部）や論文を読んでおくことが当たり前であり、そのための資料（指定書やコースパック）を図書館で整備して学生の利用に供することが当然のことと考えられてきた。しかし日本の場合は、そもそもそのような授業が展開されること自体が稀であり、日本の大学図書館が、米国の模倣をしてもうまく行かなかったのは当然と言えば当然である。

今日、我々が、このような過去の経験から学ぶことがあるとすれば、それは、学習においてコンテンツを活用するようにするには、単に図書館が図書館内の何かを変えるのではなく、大学教育や学習スタイルそのものを改革しようとする必要であるということである。千葉大学附属図書館は、2006年度からリエゾン・ライプラリアン・プロジェクトを展開し、授業担当教員と図書館員が協力して授業用の参考文献リストである「授業資料ナビゲータ」（以下「授業資料ナビ」）というパスファインダーを作成してきた。この試みは、学生のコンテンツ利用の契機を授業に求めるということ、このようなツールを教員と図書館員が連携して作成することに特徴がある。これは、学習とコンテンツの近接を教員と図書館員が協力して行なう、アカデミック・リンクにおける最も基本的な取り組みである。アカデミック・リンクの芽は、以前より着実に育てられていたのである。

## 建物に見るアカデミック・リンクの考え方

場所としての図書館の重要度は、電子情報環境下において低下したと言われている。確かに、電子ジャーナルの普及は、入館者数を減少させてきたし、インターネット上に存在する膨大な情報ゆえに、大学が図書館に知識を貯える必要はなくなつたという意見もある。確かに知識の入手ということだけを考えればそのとおりかもしれない。しかし、アカデミック・リンクは、図書館の伝統的な機能をヴァーチャルに再構築しようとしているのではなく、新たな学習環境の構築をめざしている。それゆえ、学生の多様な学習スタイルに応えられる学習空間を提供することは重要であり、場所を無視することはできない。

アカデミック・リンクの中核をなす附属図書館は、増改築によって、4つの建物で構成されることになった。アカデミック・リンクは、従来の図書館では今日の学生の学習環境に関するニーズに対応することは困難であるという認識にたちながらも、図書館的な良さを否定しているわけではない。それゆえ、これらの4つの建物は、それぞれの役割・個性を明確にしながら相互補完的に存在している。

L棟 Learning	黙考する図書館
I棟 Investigation	研究・発信する図書館
N棟 Networking	対話する図書館
K棟 Knowledge	知識が眠る図書館

L棟とK棟は、古くからの図書館の建物である。L棟は、静かに読書をしたり、一人静かに思考する学習空間である。換言すれば伝統的な図書館の良さを徹底して残すことを意識した建物であり、キーボード音の出る機器の使用も認めないことにした。K棟は伝統的な書庫としての機能を中心に考えられた建物であり、貴重書室、マイクロ室、巨大な電動集密書架などを備えた知識集積拠点である。

それに対して、N棟は静寂であることを求めない。複数で学習するシーンを中心に考えられた空間であり、窓に面した席を除き、配置される机や椅子はすべてキャスター付きで、学生が自由に動かすことができる。必要に応じて大きいテーブルを作ったり、少人数に分かれたりすることができる。またホワイトボードを提供したり、iPad、PCも貸し出す予定である。I棟にはアカデミック・リンク・センターが置かれている。研究開発、コンテンツ制作の拠点として、アクティブ・ラーニングに適した新しいタイプのセミナー室や授業の収録が可能なコンテンツスタジオなどが設置されている。

「見る」, 「見られる」 ということ

今回増築されたN棟（「対話する図書館」）の基本コンセプトは2つある。1つは、学生が一人でも、グループでも、自由かつ能動的に学習できるスペースであるということである。同時に、学習に役立つコンテンツを学生に使いやすい形で提供することと、また学生の活動を必要に応じて支える人材も提供することが組み合わされている。このスペースでは利用者に静寂に保つことを要求しない。しかし、学習のための空間であり、「おしゃべり」をするために来る場所ではないということは周知したい。

もう1つは、この空間で展開される様々な活動の「見る」(see)「見られる」(be seen)化にある。これは、英国のJISC (Joint Information Systems Committee)の「図書館の未来」プロジェクトにおいて作成されたビデオの中で、サラ・トマス氏（オックスフォード大学図書館長）が、「人々が語り合っている姿等を見ること、見られることによって、刺激を受ける」という趣旨のことを語っている点にヒントを得ている。そのような「見る」「見られる」環境を実現するために、N棟においては、空間を極力細切れにしないようにするとともに、各部屋のしきりは透明ガラスにした。つまり、囲われていながら、活動のすべてが見えるようになっているのである。この棟では、多様な学習活動が展開されるだけではなく、様々なセミナー、プレゼンテーション、あるいは講演が行われるだろう。それらがすべて「見られる」状況におかれ、それを目にする学生たちに様々な知的な刺激を与えるはずである。また、学生自身がこのスペースにおいて展開される活動の企画に参加し、自ら考え、何かを作り上げていくことこそが、まさにアクティブ・ラーニングである。

その特徴を最も色濃く持っているのは1階のプレゼンテーションスペースである。このスペースでは、例えば、毎週決まった時間に様々なトピックのセミナーが開催され、それを学生たちが、座ってじっくり聞いたり、あるいは通りがかりに建物の外から様子を覗くこともできる。閉鎖的な空間で行なわれがちな知的活動を開放的な場所において展開することで、新たな知的活動を生み出すというスパイラルが生じることが期待されている。

アカデミック・リンク・センターが置かれるI棟においても、「見られる」という概念は徹底されている。1階のセミナー室は、新しいタイプの授業を行なうことを想定しており、椅子、机はすべて可動式、前後の壁も一面のホワイトボードとした。そして、このセミナー室での活動状況は、外からも見ることができるようになっているのである。「見る」「見られる」ことの教育的効果を期待したい。

見せる書架「ブックツリー」

アカデミック・リンクの象徴的な書棚が「ブックツリー」である。これは、N棟を支える構造体（柱）の外側をとりかこむ形で設置されており、各フロアの左右に高さ3メートル、幅9メートルの大きな書棚が4面ずつある。N棟は附属図書館の前にある「かたらいの森」に面していることから、「木」のイメージをそのまま建物の中にとりこみ、ブックツリーと名付けられることになった。ちなみに、N棟1階の前面の一部は開放することができ、かたらいの森との一体感を醸成することができるようになっている。

N棟全体のコンセプト同様、この書棚も「見られる」ことを意識している。実際、ブックツリーは建物の外から見え、まぎれもなくここが図書館であることを示している。ことさらに見られることにこだわるのは、グーグルでは探しきれない貴重な資料群が図書館にはあることを示すためである。ここでは、インターネット上では入手できない紙の図書を、棚を作る人の視点で見せることにより、見る人に新たな発見をもたらすことが意図されている。これまで図書館の蔵書は、日本十進分類法（NDC）のような一般的な分類法に従って排架されてきた。多くの資料を不特定多数の利用者に提供するためには、このようなニュートラルな方法に依らざるを得ない。その一方で、ある図書とある図書が隣り合って並ぶことで、1つの文脈が生まれ、それが新たな価値を生むことがある。それは棚を作る人の視点に依るのであり、その面白さがあるはずなのである。

この棚を作るのは誰かということが問題になるかもしれない。それには教員、学生などさまざまな人が考えられる。図書館でもこれまで様々な企画展示をしてきたが、いわばお宝的な図書をケースの中に入れて見せることが多かつたはずだ。もちろんそのような扱いをしなければならない図書があり、それを死蔵しないためにも、展示は重要である。しかしブックツリーの書棚は、言わば「触って使える展示」のための場所なのである。

ブックツリーには、もちろん展示以外にも多様な使い方が想定される。アカデミック・リンクの特徴の1つである「授業資料ナビ」に掲載される資料は、2階のブックツリーに展開される。千葉大学に所蔵されるコレクションの一部もこの書棚に並べられる。特に外からよく見え、図書館の入館ゲート外側にある1階東側のブックツリーは、全学のギャラリー的な場所として活用されることが期待される。

コンテンツを作り、提供する

アカデミック・リンクが、日本でラーニング・コモンズとよばれているものと違うとすれば、単に学習場所を提供するだけではなくコンテンツの提供を不可分の要素として位置づけていることにある。また、これまでの様々な電子図書館プロジェクトと違うとすれば、単に紙の図書を電子化して、例えばタブレット型端末で使えるようにすることでよしとするのではなく、「学生が必要としているものを使いやしい形で提供すること」をめざしており、紙に印刷されたものを排除していないことである。また、これまでに図書館が主導した学習支援のプロジェクトと異なる点があるとすれば、学生にとって新たな知識に触れる絶好の機会である授業を切り口としている点である。

このような特徴を持つアカデミック・リンクにおいては、授業と関連するコンテンツの制作・提供が最重要課題の1つとなる。既に述べたように「授業資料ナビ」を手がかりとして、学習の幅を広げる、あるいはより深めるために必要な図書などを案内するとともに、これらをなるべく利用しやすいように、多様な形態一紙だけではなく、電子化できるものは電子化して一で提供することを計画している。その中には「レガシーコンテンツ再生」と我々がよんでいる既刊の入手不能図書の電子化や、「デジタルコースパック」のような従来教室内で紙の形で配られるだけで終わってしまっていた教材の電子的提供が含まれている。また、授業そのものの録画・配信を可能とする「オンラインクラスルーム」というプロジェクトもあり、このような授業動画は、例えば高大連携や国際連携の推進のためのリソースとしても役立つはずである。また授業との関わりにおいては、ラーニング・マネージメント・システム（LMS、千葉大学では現在moodleが採用されている）とのリンクが不可欠である。

ここで意図しているような、多様な形態でのコンテンツの提供を実現する上で隘路となるのが、権利処理の問題である。残念ながら、日本においては、電子情報環境下における教育あるいは学習のために著作物を利用する上での適切なルールが確立しているとは言いがたく、各教員はどのような使い方なら許容されるのかという不安を持ちながら著作物を授業で使っている。I棟に設置される「ティーチング・コモンズ」においては、権利処理に関する相談を受けるとともに、様々な教育・学習資源の電子化やICT技術の利用に関する支援体制を確立したいと考えている。ささやかなスタートになるだろうが、学習資源の構築・提供を根本的に変えるための第一歩をまずは踏み出したい。その上で、電子化されたコンテンツが教育・学習のために容易に利用できる環境の構築に向け、権利者との間でコンセンサス作りをめざしていく。

アカデミック・リンクを支える人々

これまでの図書館における人的支援といえば、真っ先にレファレンスサービスが挙げられよう。レファレンスサービスは、図書館における質問回答サービスであり、個々の学生の質問に参考図書などを使って答えてきた。また様々な情報リテラシースキルを涵養するために、データベースの利用法、文献管理ソフトの使い方などの講習会が継続的に開催されてきた。アカデミック・リンクでは、学習環境を変えるという観点から、人的支援を強化する。しかし、学生のスキルの多様性を考慮し、集合型の講習会は極力減らし、その一方で個別的な人的支援にリソースを傾注する。アカデミック・リンクでは、学生の学習活動を支援する人々がN棟2階に集中して活動することになっているが、ここで学習を支援する人々は、必ずしも図書館員だけではない。ここには学生もいるし、教員もいる。

学生による学生のための支援として、アカデミック・リンクではAcademic Link Student Assistant (ALSA／アルサ)をスタートさせる。これは全学的に展開されるステューデント・アシスタント制度の中に位置づけられるもので、アカデミック・リンクで活動する学生に対して特に与えられる呼称である。学習支援においては、「数学」「物理」「化学」「レポート執筆」といった科目、トピックごとに時間を決め、大学院生や学部上級生がN棟2階に待機する。「レポート執筆」は、米国の大学図書館におけるライティング・センター機能に他ならない。また、ALSAの活動は、学習支援のみに限定される訳ではなく、コンテンツ作成の技術支援などにも展開される。

教員によるサポートは「オフィスアワー@アカデミック・リンク」という形で実現される。オフィスアワーは千葉大学においても広く普及していると考えられるが、学生の中には、教員の研究室を訪ねていって質問するのは躊躇するという者もいるだろう。それゆえ、N棟の開放的な環境の中で、教員と学生をリンクできるようにするのである。広く教員の皆さんとの協力を求めたい。

スタッフに関しては、「新たな専門職」の設置を提案していく。これまでの教員／事務という二分法に当てはまらない、中間的な専門職の創出である。学習支援、コンテンツ作成にかかる技術支援、著作権に係る権利処理など、専門的な内容を持ちながらも適切な雇用制度がない業務がアカデミック・リンクにはたくさんある。このようなスタッフの充実と教員、学生とのハイブリッドなサポート体制が、アカデミック・リンクを支えるのである。

## あとがき

アカデミック・リンクという構想が実現した背景には、多くの方々のご理解、ご支援があった。何よりもまず、予算面での支援をいただいている文部科学省のご理解、アカデミック・リンクの活動を支援するために包括協定を締結してくださった大日本印刷株式会社およびグループ各社のご協力、高等教育におけるコンテンツの重要性を理解し、積極的に対応してくださった出版社の方々に対して、記してお礼を申し上げる。また学内においては、斎藤康学長、徳久剛史理事、野波健蔵前理事（現副学長）ほか、役員の先生方、池田輝司事務局長（理事）をはじめとする事務局の方々の強力なサポートがあったのはいうまでもないことなのではあるが、記して改めてお礼申し上げる。

アカデミック・リンクの原点は、1990年代後半に千葉大学附属図書館を中心に構想された「（仮称）総合メディアホール」にある。これを先導された土屋俊元附属図書館長は、館長就任以来、千葉大学のみならず日本の大学図書館の発展の方向性に大きな影響を与え続けてこられ、アカデミック・リンク・センターの発足にあたってはセンター設置準備委員会委員長を務められた。また、アカデミック・リンク構想の具体化が進められたのは、西村靖敬前館長の時代である。両館長のご尽力に対しても心よりお礼申し上げる。

最後に、センターの教員、情報部（附属図書館）の職員のみなさんの献身的な努力に対して心からの感謝を表明することをご寛容いただきたい。

アカデミック・リンクはようやく始まったところである。これを使う教職員の皆さんや学生諸君との相互作用のなかで、アカデミック・リンクは変化していくだろう。この変化の先に、新しい学習の姿が具体的に見えてくることを願っている。

2012年3月 千葉大学アカデミック・リンク・センター長  
附属図書館長、文学部 教授  
竹内 比呂也

アカデミック・リンク コンセプトブック  
2012年3月14日 発行  
発行者 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
〒263-8522 千葉市稻毛区弥生町1-33  
<http://alc.chiba-u.jp>





千葉大学